

「ふたり、目玉焼き、その他のささいな日常」

関戸哲也

登場人物

女 男

二人、舞台ツラセンターに立っていて、客席を見つめながら。

女 「あのさ、人が死ぬ時って、「そーまとー」の様に思い出が流れるっていうじゃない？あれ、ホントかな？」

男 「ん？」

女 「あれ？言わない？「そーまとー」の様に思い出が流れるって」

男 「ま、なんかそんなようなこと聞いたことはあるね」

女 「ん？」

男 「ん？」

女 「「そーまとー」ってなに？」

男 「は？」

女 「「そーまとー」っての良く知らないんだけど」

男 「え？知らないの？」

女 「うん。何回か口にしたことはあるはずんだけど、いざそれがどんなのかって思い出そうとすると全然分かってないんだ。そんな事ってない？」

男 「いや、良く分らないけどさ」

女 「知ってる？「そーまとー」」

男 「いや、僕も良く知ってるわけじゃないんだけどさ」

女 「「そーまとー」か・・・」

男 「「そーまとー」ね（笑って）「トースター」っぽいね」

女 「は？」

男 「いや、なんかさ似てない？語感的にさ。ね、ホラ「そーまとー」と「トースター」って・・・」

女 「いや、ゆっくりはつきり言っただけで「そーまとー」と「トースター」はまるで違うものだけどね」

男 「うん、ゆっくりはつきり言わないで」

女 「全然違うからさ。どんななんだろうね？「そーまとー」」

男 「見てみたい？」

女 「そりゃ見てみたいよ。だって・・・」

男 「（遮るように）きつとね」

女 「ん？」

男 「こんな感じのことなんじゃないかな」

男、指パチンと。幻想的な明かりとメロウな音楽が流れる。

二人、機械仕掛けのようにリズムに乗ってテーブルにつく。

朝食風景。

男がテーブルの上のハムエッグの卵を口つけて吸い出そうとしている。

男 「(あきれてて) まだだ・・・」

女 「ん？・・・なによ」

男 「吸えないじゃん」

女 「は？」

男 「だからこの目玉焼き。中の黄身が吸えないんだけど」

女 「ん？」

男 「目玉焼きを固く焼きすぎるからせっかくの半熟の黄身が固まって中の目玉焼きが吸えませんか・・・」

女 「・・・うん」

男 「「うん」じゃないよ。せっかくの日曜日の朝が台無しじゃないのよ！」

女 「そんなこと無いでしょ？」

男 「そんなことあるでしょ？せっかくこれから素晴らしい一日が始まるなって思ってる矢先だよ？何だって僕はバカみたいに固い黄身を吸ってるんだよ！コレは目玉焼きにキスしてるだけでしょ？え？これさ・・・こうしてさ・・・目玉焼きに・・・！こうして！キスしてるってことだよこれは！うれしいか？目玉焼きにキスするの！」

女 「・・・何を朝からそんなに怒ってるのよ？」

男 「黄身が吸えないからさ」

女 「分かった分かった分かったよ。吸えないんですよ黄身が・・・」

男 「そうだよ。目玉焼きの一番の醍醐味であるところの黄身がね・・・コレ固くなっちゃってるから吸える状況じゃなくなってるんだけどさ・・・」

女 「分かったてば」

男 「わざとでしょ？」

女 「は？」

男 「わざとやってるんでしょ？」

女 「何言ってるのよ？」

男 「だってそうじゃなくちゃこんなに固くする必要ないでしょ？卵」

女 「聞きたくないの！」

男 「え？」

女 「あなたそれやる時「ジュルジュル」っていうじゃない？！それ聞く度に虫酸が走るの

よ。「ジュルジュル」言ってるの聞きたくないの！分からないの？自分で！それが汚いって事に！？」

男 「き・汚い？」

女 「汚いよ！我慢ができないの！」

男 「なんで今まで言わなかったの？」

女 「言ったらやめた?!」

男 「だってコレは僕の唯一の楽しみなんだからさ・・・」

女 「なんでこれが楽しみなのよ!?しかも唯一の！」

男 「(目を伏せて)・・・うん」

女 「・・・凹まないでよ」

二人リズムに乗りながらも一度、舞台ツラセンターに戻ってきて

ドヤ顔をしている男。

女 「ん？」

男 「うん」

女 「ん？これが？」

男 「走馬燈みたいな思い出」

女 「え？これ？走馬燈のように思い出が駆け巡る時こういうの見るってこと？」

男 「そうだよ」

女 「そうだよって・・・え？これが覚えていることなの?!」

男 「ん？」

女 「こんな、どうでもいいことをダイジェストな形で見ると？」

男 「いやいやいや・・・そんな訳ないじゃん他に色々あったよ」

女 「(ホツとして) そうだよね、そんな訳ないよね」

男 「もつとあったよ。色々」

女 「それぞれ・・・それ思い出して・・・」

二人、再びリズムに乗って冷蔵庫のある場所にゆく。

男 「なんで守らないのよ！」

女 「何がよ」

男 「これこれ」

女 「なになに？」

男 「読んでみてこれ！」

女 「は？」

男 「読んでみてよ」  
女 「いいよ・・・」  
男 「なんて書いてあるの？ね、これなんて書いてあるの！？」  
女 「洪々といった感じで」 2016・5月・14  
男 「ええ?!」  
女 「なにになに？」  
男 「なにじゃなくて、賞味期限が切れてるんだけど」  
女 「うん」  
男 「ええ?! (マネして)」「うん」?ええ!?(マネして)「うん」?!」  
女 「なんなの? 一体」  
男 「いや、だから賞味期限が切れてる牛乳が冷蔵庫にあるっていう衝撃をこうやって表してるわけけど・・・」  
女 「何やってるのよ」  
男 「考えられる? ねえ? 考えられる?! 賞味期限を過ぎてしまったって事はだよ? これらはもはや牛乳ではなくなってしまって別の何物かになってしまったって事だよ。見た目は牛乳パックに入ってるから牛乳なんじゃないかって思ってしまうかもしれないけれども! 牛乳なんてモンじゃない名状しがたい謎の白い液体だよ。その謎の液体がさ、ウチの冷蔵庫に鎮座ましましてるんだよ。これをさ、衝撃を持って君に伝えないといけないっていう使命感がね?・・・」  
女 「もううるさいな・・・」  
男 「うるさい? え? 僕が? うるさい?」  
女 「声が大きいよ。いいじゃない? ちよつとだけでしょ賞味期限が過ぎてるの」  
男 「ちよつとじゃないよ今日何日?」  
女 「は?」  
男 「何日よ今日?」  
女 「5月・・・」  
男 「19日だよ」  
女 「自分で答えるんだったら聞かないですよ」  
男 「ってことは何日過ぎてるの?」  
女 「んー」  
男 「5日だよ」  
女 「だから自分で答えるんだったら聞かないでってば」  
男 「賞味期限を5日過ぎた牛乳ではなくなってしまうたモノがさ・・・」  
女 「もういいよしつこいな。大丈夫よ。大げさなんだってば」  
男 「大げさ? 僕が? 大げさ?」  
女 「そんな風は大げさに言わなくてもいいでしょう? タダでさえこっち忙しいんだから

さ、なんで朝に呼びつけてるの?!もう行かないといけないの!」

男 「これは冷蔵庫に対するちっちゃいテロだよ?」

女 「何言ってるのよ!大丈夫だってば!賞味期限ってのはね、だいたいここまではおいしく食べられますよって目安なの!だから一週間ぐらい大丈夫よ腐りなんかしないってば」

男 「大丈夫じゃないよ!僕の体はとても繊細に出来てるんだ!君が思うよりずっと繊細にね!こんな少しでも賞味期限遅れるモノ食べたらお腹壊すどころじゃなくなるんだからね!」

女 「大丈夫だって!」

男 「大丈夫じゃない!」

女 「そんなこと言ったら昨日出した湯豆腐、10日前の奴だからね!」

男 「……………」

女 「今、何ともないでしょう?だから大丈夫なのよ」

女、行く。

男、吐きそうになりながらトイレに駆け込む。

二人、再び舞台ツラセンターまでやってきて。

女 「え?」

男 「ん?ん?」

女 「色々あったよね?二人さ……………」

男 「うん。あった……………あったよね」

女 「あの……………こういう……………その、つまらないことだけじゃなくてさ」

男 「うん。うんうん……………あったはずだよ」

女 「ね、もしかしてさ、あんま覚えてないんじゃないの?」

男 「まさかまさか」

女 「もつと他のことは思い出さないの?」

男 「他の?」

女 「なんかこう大事なこと」

男 「大事なことか……………」

女 「忘れてるんでしょ?」

男 「いやいや……………ん?……………覚えてる覚えてる」

二人、リズムに乗って再びテーブルにつく。

男、食べている手を止めて。

男 「ね、何これ?」

女 「ん？何ってカレー・・・特製なんだから」  
男 「あのーさ、言ってたよね、僕がその・・・カレーが好きだって」  
女 「うん。だからこう腕にヨリをかけて・・・」  
男 「うんうんうん。それはありがたいよ。それはありがたいんだけどさ」  
女 「なに？」  
男 「僕さ、ホントに好きなんだよ。カレー。普通の奴が」  
女 「ん？」  
男 「普通の奴が好きなの」  
女 「(食べながら) うん、だから普通の奴だよ」  
男 「や、や、や・・・お？ん？なんか届いてないな・・・。本当に普通の奴が好きなんだよ」  
女 「うん」  
男 「あのね、カレールーの箱の裏に作り方あるでしょ？あの通りのカレーが好きなの」  
女 「ん？」  
男 「書いてあるでしょ？カレールーの箱の裏に作り方がさ」  
女 「ああ・・・なんか書いてあるね」  
男 「なんかって、そんな軽くスルーしないでよ。寸分違わずアレ通りつくって欲しいの」  
女 「カレーはどうやってもおいしいわよ」  
男 「水はどのくらい入れたの？」  
女 「え？」  
男 「水！」  
女 「どのくらいって普通にお鍋に入れたわよ」  
男 「何ml？」  
女 「は？」  
男 「何ml？」  
女 「は？」  
男 「何ml？」  
女 「知らないよ。何となくで入れただけだから・・・」  
男 「あのね、あのね・・・」箱分で作ると1400mlなの。これで作ると12皿出来ちゃうから半分として700mlでしょ？それ計った？」  
女 「は？」  
男 「計った？それ？」  
女 「計らなくていいって、カレーなんだからさ」  
男 「カレーだからこそ計らなくちゃいけないんだよ。ルーは何個入れたの？」  
女 「は？」  
男 「何個入れたの？ルー？」  
女 「3〜4個」  
男 「見たの？箱の裏」

女 「うるさいってば」  
男 「だからあれだ、こんなにシヤビシヤビなんだよ」  
女 「シヤビシヤビ？」  
男 「シヤビシヤビだよ・・・後何？なんか入れた？」  
女 「ん？」  
男 「カレーに・・・なんか入れた？」  
女 「ああ・・・裏技でね、コーヒー入れるとカレーにコクがでるのよ」  
男 「何をしてるんだよ！」  
女 「は？」  
男 「なんでそんなの入れてるの？」  
女 「え？なんで？おいしくなるのよ？醤油も入れたし」  
男 「台無しだよ」  
女 「は？」  
男 「ハウスの企業努力が台無しだよ」  
女 「おいしいんだってその方が」  
男 「それから、ジャガイモも人参もなんでこんなにちっちゃいの？」  
女 「食べやすいのよ。その方がさ・・・」  
男 「見たの？箱の裏！」  
女 「うるさいって箱の裏箱の裏」  
男 「切り方もちゃんと書いてあるでしょ？なんで書いてある通りの切り方しないのよ」  
女 「おいしいでしょ？一手間かけてるのよ」  
男 「その一手間がさ・・・」  
女 「なに？」  
男 「思ってるカレーと違うんだってば！あと・・・これ・・・！（と、すくって）なにこ  
れ・・・」  
女 「は？」  
男 「これはなに？・・・一番の爆弾だよ・・・なんなのこれは？」  
女 「レーズン」  
男 「レーズン！？」  
女 「いちいち言い直さないでってば！」  
男 「カレーにレーズン?!」  
女 「そうだよ」  
男 「なんでカレーにレーズンなんか」  
女 「お洒落でしょう？その方がさ！」  
男 「カレーにレーズンを入れるとお洒落になるの？」  
女 「うるさいな！だから言ってるでしょ？特製カレーなの！」

男 「だから特製じゃなくていいんだって！カレーにレーズンって……それは豚汁にグミが入ってるみたいなことだよ?!」

女 「全然違うよ」

男 「信じられない」

女 「文句があるなら自分で作りなさいよ!」

男 「自分で作らせてくれないじゃない」

女 「作った後のキッチンが修羅場になるからでしょう?!何をしたらあんなにキッチンを汚せるのよ! ゴミ箱みたいになるでしょ?!」

男 「僕は僕で一生懸命やってるんだよ!」

女 「一生懸命ゴミ箱にしてるんでしょ?」

男 「僕はルーの箱の裏の通りのカレーを作って欲しいだけなんだけど!」

女 「一手間加えた特製カレーの方がおいしくなるの!」

男 「そこから一手間と特製つてのを抜いて欲しいんだよ!お願いだから。引き算の美学だよ」

女 「美学とか大げさだよ。そんな事したら普通のカレーになっちゃうじゃないの!」

男 「だから普通のカレーがいいんだって!求めているのはそういうことなの!」

女 「獨創性がないじゃない」

男 「いらなんだよ獨創性は!」何も足さない、何も引かない、サントリーオールド山崎「みたいなカレーを食べたいんだよ」

女 「何を言ってるのよ。いらなきゃ食べなきゃいいから」

男 「……いや、ま……、食べるけどさ……」

男、黙々と食べるが

男 「(たまらず叫んで) 何故レーズンを!」

女 「なに?」

男 「(すぐにおさえて) 何でもない……」

男、黙々と食べる。

男 「あの……今日の夜って……」

女 「夜はチャーハン」

男 「あ……」

女 「大丈夫。普通の奴。普通の奴がいいんでしょ?」

男 「ああ……良かった……」

女 「普通に納豆は入れるけどね」

男 スプーンを落とす。

二人、舞台ツラセンターまで来て。

女 「嘘でしょ？」

男 「ん？」

女 「こんな事だけ？」

男 「や、や、や、や、や……」

女 「他に覚えてないの？」

男 「や……」

女 「あんだだけ一緒にいたんだよ？」

男 「や……」

女 「……感動できないんだけど」

男 「え？」

女 「これじゃ、感動して行けないんだけど……」

男 「……うん」

女 「走馬燈のように思い出してるんだからさ」

男 「……うん」

リズムともに寝室。

鏡台に向かって髪をとかしている女、その後ろに男。

男 「どこやったの?!」

女 「は？」

男 「「は？」じゃないよ!どこやったの?!コーネリアス!」

女 「コーネリアス？」

男 「そうだよ!コーネリアス!」

女 「えつと……あの猿の被り物のこと？」

男 「猿じゃない!アレはコーネリアスだよ!」

女 「捨てるよって言ったでしょ？」

男 「え?聞いてないよ!」

女 「何も聞いてない方が悪いのよ」

男 「なんで捨てるのよ!」

女 「気持ち悪くてしょうがないんだって!夜中に帰ってくると猿の生首が部屋の中にあるなんて!」

男 「コーネリアスだよ」

女 「なに？」  
男 「猿じゃなくてコーネリアス」  
女 「なんだか知らないけどさ」  
男 「コーネリアスは英雄だよ」  
女 「猿の化け物だよ」  
男 「猿の惑星。猿人がある惑星を支配してるんだ。彼らは化け物なんかじゃない。コーネリアスはその中でも英雄なんだよ」  
女 「夜中にその猿の仮面と目が合う私の気持ちわかる？猿の生首と真夜中に目が合う私の気持ちって分かるもんなの？」  
男 「コーネリアスはさ」  
女 「猿ね」  
男 「猿じゃないってば！」  
女 「じゃ、なに？」  
男 「・・・猿っぽい人だよ！」  
女 「は？」  
男 「コーネリアスは猿っぽい人」  
女 「何の事よ？」  
男 「映画見れば分かるって！」  
女 「は？」  
男 「(自分でももを叩いて) ああ！あんま言うとなタバレになるからな！こんな時でもエチケットを守る映画ファンとしての矜持がねたましい！」  
女 「バレてもいいって別に見ないから」  
男 「見たとき絶対後悔するよ。ああ聞かなきゃ良かったって」  
女 「見ないってば！絶対！」

と、言いながら女、指パチンと

男 「ねえ、トイレットペーパーがどこにあるか分からない・・・(ズボンを引き上げて) ゴメンって」

再び女、パチンと

男 「横に寝ながら) ゴミ捨ては明日やるってば」

再び女、パチンと

男 「(違う格好で横に寝てテレビ見ながらあくまでだらしなく)フフ…結婚でもする？」

再び女、パチンと

男 「僕は下ろしたよ！？トイレの便座！アレじゃない？！幽霊的なさ！」

再び女、パチンと

男 「(泣きながら) ホタルの墓はずるいよね」

再び女、パチンと

男 「(コップを持ちながら片手でコップの上の膜を摘んで) ホットミルクの上の薄い膜が本当に許せないんだけど」

パチン

男 「(咳込みながら) なんでバルサンたいてからケータイ忘れてるのに気づくかな」

パチン

男 「だからチャーハンに納豆を混ぜないでってば」

パチン

男 「(テーブルに顔を横たえて) こうするとうっすらホコリ積もってるの見えるのよ」

パチン

男 「慌てて取り返そうとして) 違う違う。タバコは明日からやめるんだってば」

パチン

男 「(ニタツと笑って) 12時過ぎのカップラーメンはメスブター直線だけど？」

パチン

男 「ボロ布じゃないって。タオルだよ！お気に入りでだから原型無いくらいボロボロだろうがまだ使うの！」

### パチン

男 「(ケータイを耳に当てながら)くシリアスに)・・・それってどういう・・・だつて検査の時は何でもないって話だったじゃないですか・・・(女を見て)え?・・・」

女 「うん」

男 「え?」

女 「だから「そーまとー」何思い出すかなって思ってた」

男 「え?もう全然時間ないの?」

女 「・・・うん」

男 「え?だつてさ・・・」

女 「ごめん・・・時間ない・・・言つたよね「そーまとー」だつて」

男 「あ・・・じゃ・・・今までずっと?」

女 「最初から言つてたでしょ?これ「そーまとー」って」

男 「・・・そう」

女 「うん」

男 「(焦つて) あつたよ・・・なんかあつたつて・・・なんかこう大事なことさ・・・トイレ最後までしゃがまずに立つたままオシッコしてたからすごい怒られたりさ・・・夜にゾンビ映画見てて、しかも僕笑つて見ててさ・・・気持ち悪いつつすげえ怒られたりさ・・・帰る時間のLINE入れないで叱られたりさ・・・こうやって言うと叱られてる割合の方が圧倒的に多いけどさ・・・喜んでくれたのはアレだ・・・誕生日に買ったプレゼント、ファルコン号スターウォーズの・・・女の子にファルコン号って気に入るかなと思つたんだけど・・・君・・・めっちゃ喜んでくれて・・・ああこういうプレゼントも好きなのかなつて・・・」

### 女、行くこうとする。

男 「(途中から泣き出しながら) ちょっと待つてよ!・・・僕・・・実は卵固くても平気な人かも。固い方が卵本来の味が味わえるもんね・・・レーズン入りのカレーも慣れればきつと大丈夫な気がする。相当な努力がいるって事は分かつていて欲しいけど・・・ま、きつと色々言うのは色々言うけどさ。ホラ味覚つてちよつとずつ変わっていくって言うしね。納豆チャーハンに対する憎しみだけは変わらないと思うけど・・・賞味期限も・・・(お腹を押さえて) 2週間ぐらいまでは大丈夫じゃないかな・・・はは・・・2週間はお腹壊しちゃ

やうか・・・捨てよう、コーネリアスは・・・だって猿の惑星は作りすぎだよ。どんだけシリーズ化してるんだよ。傑作だったのはチャールトンヘストンの一作目だけだから・・・。ファルコン号はカッコいいけど・・・女の子にプレゼントするべきじゃなかった。しかもスターウォーズ見たことない子に・・・。違うんだよ。僕がそれに気づかなかったのは、君が・・・あんなに喜んでくれたからさ・・・。」

女 「・・・ゴメンね」

男 「待ってって・・・大事なこともまだ何にも話してないじゃん。あんなだけ一緒にいたのに・・・何一つ話せてないじゃん・・・もう既読スルーしないよ・・・男としては屈辱だけど、オシッコは座つてするよ・・・便座の犯人は幽霊なんかじゃない、僕だ・・・。トイレットペーパー探す時はズボンをあげるし、ゴミは文句言わずに捨てに行くし、ドラツとした感じで結婚のこと口にしたりはしないよ・・・ゾンビ映画だけはお願い・・・生き甲斐だからさ・・・ゴメン、「そーまとー」なのにね・・・。ダイジェストなのにね・・・こんな事しか、浮かんでこないや・・・もつとたくさんあつたはずなのにね・・・こんなくたらないことしか浮かんでこない・・・でもさ・・・そばにいてくれないかな・・・ねえ・・・そばにいてくれないかな・・・。」

女 「(振り返って) 本当に大したことなかったねあたし達。人に話せるようなことなんか何にもなかった・・・でも・・・充分楽しかった・・・ありがとうね」

男 「そっちは・・・行っちゃダメなんだけどな！」

女、光の中へ消えてゆく。

男、指パチンと。幻想的な明かりとメロウな音楽が流れる。

男、一人で、機械仕掛けのようにリズムに乗ってテーブルにつく。

朝食風景。

男がテーブル上のハムエッグの卵を口つけて吸い出そうとしている。固くて吸えない・・・。ちょっと動きが止まる男。ナイフとフォークで切ってみる。

と、中は固い。男、しばらく考えパクツと目玉焼きを食べてみる。小刻みにうなずく・・・何度も何度もうなずく。パンに手が伸びる。

同時に音楽。

照明カットアウト。

幕